

司 式 門 脇 献 一 長 老

前 奏

奏 楽 大 日 南 苗 香 姉 妹

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 38 : 1 いさおなきわれを 血をもてあがない

イエス招きたもう みもとにわれ行く アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 3 罪 の 告 白 ②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならないことをせず、してはならないことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 38 : 6 いさおなきわれを かくまであわれみ

イエス愛したもう みもとにわれゆく アーメン

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 5 使 徒 信 条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマ

リアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、としえの命を信ず。アーメン。

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 東部中会青年修養会を覚えて 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖書朗読 エフェソの信徒への手紙4章1～6節 (新約聖書355頁)

説教・祈祷 「一つである幸い」 杉山昌樹教師

* 賛美歌 讚美歌502番1～2節

- 1 いともかしこしイエスの恵み 罪に死にたる身をも活かす
主より賜るあめのかてに 飢えし心も飽きたらいぬ
世にある限り 君の栄えと慈しみとを語り伝えん
- 2 救いの恵み告ぐる我は 楽しみあふれ歌とぞなる
滅びをいでしこの喜び あまねく人に得させまほし
世にある限り 君の栄えと慈しみとを語り伝えん アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 68 あまつ御民も地にある者も

あまつ御民も地にある者も 父・子・御霊の神を讃えよ 神を讃えよ アーメン

* 祝 祷 杉山昌樹教師

後 奏 (黙祷)

報 告 門脇献一長老 (司会・受付 次週：古澤兵庫長老)

本日 受付 1階：若月 学執事 2階：那珂信之執事 / 動画：番場駿也兄弟 録音：門脇光生兄弟
次週 受付 1階：佐藤紀子執事 2階：藤井牧子執事 / 動画：大日南信也執事 録音：森永翔馬兄弟

早いもので8月も半ばになろうとしています。今年は8・15集会が文字通り、来週15日となりましたが、当初の予定では今日行われることになっていました。今年は、スパーリンク先生が、アメリカ同時多発テロからの20年を振り返ってくださいます。その8・15集会では私の記憶では、以前は副題がつけられておりました。それは、「平和を創る集会」です。この平和というものがどのようなものかについて正確にお話すれば長くなりますが、今は一言、神様による平和とだけ確認します。そして、そのような神様の平和を、この地上で実現していきましょう、というのがあの8・15集会の趣旨です。しかし、それでは、具体的にそれは、どのようにして実現するのでしょうか。わたしたちは、どうしたら平和を、自らの手で、この地上に創り出していくことができるのでしょうか。そもそも、そんなことができるというのはいささか傲慢なような気がしなくもありません。しかし、その道はあるはずで、それを今日の聖書から探したいのです。

パウロの召し、みんなの召し

このところでパウロは、改めて自分が「主に選ばれた囚人」であると確認します。それは、3章の冒頭でも語られていました。パウロはこの言葉をもって、自らの歩みをまとめていえると言えます。それは、自らの働き、それも神様に召されて以来、異邦人のために働き続けてきて、ただそのことのゆえに囚人となっているけれども、それは恵みの表れだ、という彼の自己理解の表れです。もう少し詳しく言いますと、パウロは、使徒言行録にある通り、キリスト者を迫害しようとダマスコに向かう途中でイエス様と出会い、それまでの自分の生き方の間違いに気づいて、今度はイエス様を宣べ伝えるようになりましたが、それが、かつての仲間であるユダヤ人たちにとってはそのまま裏切り行為とみなされ、何かにつけて妨害や混乱に巻き込まれるようになったのでした。そして、エルサレム教会に献金を届けた折に、神殿で難癖をつけられて、裁判となって、ついにはローマへと護送されるようになったのは、使徒言行録にある通りです。しかし、そのような数奇といえど数奇な歩みをパウロは全く悔いていません。むしろ喜んでいます。それは例えば3章で「落胆しないでください。この苦難はあなた方の栄光なのです」（12節）とある通りです。パウロは自らの歩みが神様の恵みの中にあり、その表れであることを知っています。それは何よりも、異邦人に福音が伝わり、彼らが本当の仲間になっていることがわかっているからです。福音の仲間がいる、これこそがパウロの言う神様の栄光の表れです。

パウロの勧め－ふさわしく

すでに、そのような神様の栄光の表れを知るものとして、パウロは、ここで改めて、エフェソの人々に、新しい勧めの言葉を語りだすのです。この4章全体が勧めの言葉ですが、特にこの始まりの部分が全体の基礎です。そこで一つの言葉に注目します。それは、「神から招かれた」という言葉です。これは、エフェソの人たちが、神様によって召されている、ということです。この「招かれている、召されている」ということは、4節にもあります。そこでは明らかに一つの方向に向かうこと、神様が与えて下さった希望へと向かうこととの関連で語られています。いずれにしても、それは、神様の召しです。そして、それは、私たちもまた同じです。もちろん、私たちは、それぞれ、別々の日に生まれ、別々の家庭に育ち、全く違った個性を持った人間ですが、しかし、一つ確かなことは、キリスト者である以上、神様からの召しだしに答えたもの、という意味では、一緒だということです。その点では、色々な国の、様々な教派の教会員であっても、それこそ、上福岡でも、坂戸でも、新座でも、全く違いはありません。そこに一つのキリスト者らしさがありま

す。神様に呼ばれたものというキリスト者らしさです。そして、パウロは、この4章を始めるにあたって、そもそも、この4章は、ここまでパウロが語ってきたことを前提として、具体的な生き方を語っていくところですが、まずこの4章の冒頭では、招きにふさわしく、ということが言われま
す。神様に招かれた者には、それにふさわしい生き方があるというのです。そして、まさにそのような生き方こそが、平和を創る道へとつながっていると私は理解しています。

柔和さへ

神様の民にふさわしく生きることこそ、平和を創る生き方です。ということを確認したうえで、ではそのような平和を創る生き方とは具体的に何かです。それはおそらくこのところで語られていることの実現を通してということになります。2節では早くも、愛が語られ、忍耐ということが言われます。2節の冒頭、「一切高ぶることなく、柔和で」とありますこのところを、新しい協会共同訳では「謙遜と柔和の限りを尽くし」としています。こちらの方が元の言葉に近いようです。そこで言われているのは、あらん限り、自分が持つことのできるすべての謙遜と柔和さを身に着けようというのです。しかも、それは実際の関係です。ふと思い出して、もっと謙遜にならなくちゃ、というような感じではないのです。そうではなくて、実際に今目の前に人がいる、それもちょっと困った人だなあ、と内心思っている、そんな場面なのです。ちなみに、このところの「柔和」という言葉は、「哀れな」とか「貧しい」といった意味合いをも持つようです。はっきり言いますと、負けてしまうようなあり方、みすぼらしいあり方です。でも、イエス様は、ご自身を「柔和だ」と言われました（マタイ11：29）。そして、実際に、ロバに乗って柔和な王としてエルサレムへと入っていかれたのでした。そうであれば神様に招かれたものは、当然ながら、このイエス様の姿に一致していく、ということになるはずですが、それも実際に目の前の人と丁々発止とやり合っている時にです。まさにその時に、あえて勝ちを取りに行くべきかどうか、というところでふみとどまること、そのような柔和さが求められるのです。

愛をもって忍耐

とはいえ、目の前にいる人がとんでもないことを言っている、こん畜生とかわかかとしている、そんな時に、いちいち思いとどまってなんかいられるか、と思われる方もあるかもしれません。そして、実際のところ、正すべきことを正す必要がある場合もあるかもしれません。これはもう怒ってもいいだろう、怒鳴りつけてやった方が、本人のためではないか、というような場面は確かにあることでしょう。しかし、そこでなってお考えたいのは、パウロはそのようなことをしらない人ではないはずだ、ということです。そこで同じパウロが書きましたローマ書の言葉を読みます。

「神はその怒りを示し、その力を知らせようとしておられたが、怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば、それも、憐れみの器として栄光を与えようと準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば、どうでしょう。」（9：22, 23）。神はその怒りを示し、とあります。神様が怒っているというのです。人間に対して、怒っているのです。このところは、ユダヤ人について語っているところですから、ご自身の選びの民に対して怒っているのです。しかし、そのようなものたちを「寛大な心で耐えた」と続きます。怒って突き放してしまってもよいけれども、しかし、そうしない、忍耐して、むしろ、自分の民とすることで栄光を現わそうとしておられる、と続きます。それと同じように、あなたたちは「神様のような愛をもって互いを忍耐するべきだ」とパウロは勧めるのです。

平和のきずな

これはとても具体的なことです。リアルな今このところの日常の話です。上福岡でも、新座志木

でもいいのですが、具体的なAさんと話していて、あるいはBさんと話していて、お互いに、「えっ」、「なんだそれは」と感じたとしても、そこで、「君ちょっと」としてしまいかどうかという話です。それで何でそうなるのか、と言いますと、この3節にありますとおり私たちは「平和のきずなで結ばれて」いるからです。この平和とは、イエス様の平和です。同じエフェソ2章にある言葉を少し長くなりますが読んでみます「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」。イエス様は、あの十字架のみじめさ、弱さを通して、私たち人間を、神様と、またお互い同士についても、平和なものにしてしまっている、一つの体としてしまっている、というのです。もう結び付けられてしまっているのです。これがパウロの言う、「平和のきずな」です。あなたたちはもうこの平和のきずなの中に入っているというのです。

一つの希望、一つの信仰

だからこそ、この3節の後半では「霊による一致を保つように」といいます。いうまでもなくキリストの霊、聖霊なる神です。今日はもうあまり丁寧にお話しする時間はありませんが、このところでは、この後4節からずっと一つ、ということが繰り返されています。5節では「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ」とあります。私たちは洗礼を受けたときに、色々な洗礼があったのではありませんでした。いろいろな神様がいたのでもありませんでした。ただ一人の神様を信じて、この方こそ、と納得して、みな同じ信仰をもって、同じ言葉で洗礼を受けました。このような私たちは、基本的にみな同じ希望に向かって進んでいると、パウロは指摘しています。それが「一つの希望にあずかるように招かれている」という言葉の意味です。神様がそのように私たちを招いておられるのです。だからこそ、その招きにふさわしく生きるようにというのがそもそものパウロの勧めでした。その通りに、私たちは、神様による、平和をまずはお互い同士の間で実現する、という希望に向かって、日々進んでいくのです。

主と共に

そして、その時には、この6節で書かれていることが、私たち間で実現します。もう一度読んでみます。「すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上におられ、すべてのものを通して働き、すべてのものの中におられます。」この場合の、「すべてのもの」とは、私たちのことです。キリストの体とされた私たち教会に集うものはすべて、ということです。そのような私たちには唯一の神様がいて下さって、その神様は、私たちの上におられ、私たちを通して働き、私たちの内におられる、というのです。そして、私たちを通して働くというのは、わたしたちが、互いの中に平和を創っていくことによって現実の出来事になります。

一つである幸い

このようにして、私たちは、地上において、平和を創る、という神様から与えられた希望に生きるものとなります。それは、まずは、この会堂にいるお互い、あるいはZOOMで参加して下さっているお互いの中で実現します。そして、それを超えて、他の教会の兄弟姉妹と、また、中会、大会を超え、更に教派を超えた平和を創ります。そして、そのような平和が実現するのであれば、やがてその平和は、この国にも、世界にも平和を創りだしていくことになるのです。

祈り

父なる神様、み名を賛美します。あなたは、深い憐れみと忍耐によって、私たちを愛して下さい、主イエスにおいて、私たちを召し出し、あなたを父と呼ぶことのできるものとして下さいましたから感謝します。あなたは、私たちの上に、また、わたしたち中に、また私たちの業とともにいてくださいます。わたしたちがこの恵みに生き、この週の歩においても、あなたと共に、地に平和を実現していくことができますように、何よりも兄弟姉妹を、そして隣人を愛するものとして歩めますようにお願いします。主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。